第３章　社会学教育とジェンダー

大和　礼子

１．はじめに

表 3-1 は大学学部での専攻分野別に見た学生数の推移である。

表 3-1　専攻分野別にみた学生数（大学学部）の推移

女性	1975年	1980年	1990年	1995年	2000年	2003年
計	356,167	414,384	554,666	767,886	913,222	994,506
人文科学	128,945	146,733	199,498	251,057	275,733	276,411
社会科学	53,443	62,440	114,930	199,637	267,789	300,961
理学	7,244	10,788	12,327	19,510	22,282	22,778
工学	2,899	9,375	15,185	35,328	46,489	47,310
農学	5,251	8,828	13,971	25,352	28,327	28,651
医学・歯学	7,288	13,026	15,782	18,929	21,145	21,604
その他の保健	22,667	26,353	28,698	38,645	56,545	71,924
家政	28,960	31,938	35,894	39,617	42,138	49,721
教育	69,860	70,010	76,444	84,528	81,160	84,327
芸術	22,645	28,695	31,532	39,739	45,094	49,511
その他	6,965	6,198	10,405	15,544	26,520	41,308
社会科学(%)	15.0%	15.1%	20.7%	26.0%	29.3%	30.3%
男性	1975年	1980年	1990年	1995年	2000年	2003年
計	1,295,836	1,320,008	1,433,906	1,562,945	1,558,533	1,514,868
人文科学	86,988	100,117	103,096	123,907	135,246	133,160
社会科学	635,224	608,561	672,395	733,987	717,828	678,699
理学	42,981	48,890	54,451	63,254	65,619	65,452
工学	331,060	334,215	375,461	421,379	420,673	399,656
農学	53,745	51,240	52,806	46,528	41,981	40,796
医学・歯学	50,227	61,724	54,101	46,738	42,551	42,072
その他の保健	12,341	16,706	17,820	17,769	23,396	28,861
家政	121	247	528	1,186	2,160	3,350
教育	49,626	65,217	64,516	62,725	56,455	52,934
芸術	16,319	16,195	16,440	19,868	20,114	22,048
その他	17,204	16,896	22,292	25,604	32,510	47,840
社会科学(%)	49.0%	46.1%	46.9%	47.0%	46.1%	44.8%

（出典）平成 16 年版『男女共同参画白書』より作成

http://www.gender.go.jp/whitepaper/h16/danjyo_hp/danjyo/html/zuhyo/fig01_08_02.html

表 3-2　社会科学を専攻する学生数と女子の占める割合

	1975年	1980年	1990年	1995年	2000年	2003年
男性	635,224	608,561	672,395	733,987	717,828	678,699
女性	53,443	62,440	114,930	199,637	267,789	300,961
計	688,667	671,001	787,325	933,624	985,617	979,660
女性の割合	7.8%	9.3%	14.6%	21.4%	27.2%	30.7%

（出典）平成 16 年版『男女共同参画白書』より作成
http://www.gender.go.jp/whitepaper/h16/danjyo_hp/danjyo/html/zuhyo/fig01_08_02.html

表 3-1 によると、女子学生が最も多く専攻している分野は、1975 年から 2000 年までは人文科学であったが、2003 年においては社会科学が一番多くなっている。そして社会科学を専攻する女子学生の割合は、1975 年の 15.0%から 2003 年の 30.3%へと 2 倍に増えている。一方、男子学生が社会科学分野を専攻する割合は 1975 年には 49.0%を占めていたが、2003 年には 44.8%とわずかであるが減少している。

その結果として、表 3-2 に示したように 2003 年では、社会科学分野を専攻している全学生のうち約 3 割を女子学生が占めるようになった。このような傾向（女子学生が占める割合の増加）は、社会学においては、社会科学全体（法学・政治学・経済学・経営学などを含む）におけるよりさらに進んでいると考えられる。いまや大学の学部における社会学教育は、女子学生の存在を考慮に入れず行うことは難しい。

それでは、女子学生と男子学生では、社会学教育に対する意識や期待に違いはあるのだろうか。この章ではこの点について、学生に対する調査データを分析することによって見ていきたい。

1.2 分析対象

この章で分析するのは、調査協力が得られた 3 つの私立大学（すべて 4 年制で男女共学）で社会学を専攻する、1 年生と 3 年生の学生に対する質問紙調査のデータである。分析対象となる学生の大学・学年・性別ごとの内わけは表 3-3 に示した。

私立大学を取り上げる理由は、まず、このプロジェクトにおける筆者の担当が「私立大学における社会学教育」であったことである。また、本プロジェクトの学生調査において、統計的分析に耐えるだけのケース数の社会学専攻の学生のデータが得られたのは、これら 3 つの私立大学だったという事情がある。さらに、2004 年度における社会科学系専攻の学部学生の中で、私立大学の学生が占める割合は 88.5%（男子 89.5%、女子 86.2%）であり（平成 16 年『学校基本調査』http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/05011201/004.htm）、このことは、日本における学部学生に対する社会科学系の教育は、ほぼ 9 割が私立大学で行われていることを意味する。社会学の教育についてもこれに似た状況にあると思われる。したがって、私立大学における社会学教育の状況を分析することは意味があることと思われる。私立大学と他の設置形態の大学との比較は、今後の課題としたい。

次に、1 年生と 3 年生に分析対象を限定した理由は、調査対象となった 3 つの私立大学のうち、B 大学ではこの 2 学年のデータしか得られなかったからである。学年という属性をそろえるために、他の 2 大学においてもこの 2 学年についてのみ分析することにした。

表 3-3　分析対象の学年・性別（大学ごと）

			男性	女性	男女計	1年生と3年生の割合	各大学の学生の割合
A大	1年生	N	36	46	82		
		%	43.9%	56.1%	100.0%	54.3%	
	3年生	N	29	40	69		
		%	42.0%	58.0%	100.0%	45.7%	
	計	N	65	86	151		151
		%	43.0%	57.0%	100.0%	100.0%	25.9%
B大	1年生	N	70	93	163		
		%	42.9%	57.1%	100.0%	54.7%	
	3年生	N	53	82	135		
		%	39.3%	60.7%	100.0%	45.3%	
	計	N	123	175	298		298
		%	41.3%	58.7%	100.0%	100.0%	51.2%
C大	1年生	N	26	36	62		
		%	41.9%	58.1%	100.0%	46.6%	
	3年生	N	30	41	71		
		%	42.3%	57.7%	100.0%	53.4%	
	計	N	56	77	133		133
		%	42.1%	57.9%	100.0%	100.0%	22.9%
計	1年生	N	132	175	307		
		%	43.0%	57.0%	100.0%	52.7%	
	3年生	N	112	163	275		
		%	40.7%	59.3%	100.0%	47.3%	
	計	N	244	338	582		582
		%	41.9%	58.1%	100.0%	100.0%	100.0%

（注）性別の回答がないためにこの表に含まれていない者 2 名

1.3 分析結果

1.3.1 大学入学前

ここでは、大学入学前の時点で、「社会科」や「社会」への興味において男女で差があったかどうかについて見よう。

高校時代の「社会科」への興味については、表 3-4 に示したように、1 年生・3 年生ともに、約 7 割の学生が「とても興味あり＋少し興味あり」と答えている。

男女差に注目すると、1 年生では「とても興味あり」が女子学生より男子学生で約 10 ポイント多い。また 3 年生では「少し興味あり」が男子学生で約 10 ポイント多く、逆に「あまり興味なし」は女子学生で約 9 ポイント多い。これらの結果から、高校時代の「社会科」への興味は、男子学生でやや高いようである（ただし 5%水準では統計的有意とはいえない）。

表 3-4　高校時代の社会科への興味

学年				とても興味あり	少し興味あり	あまり興味なし	まったく興味なし	合計
1年生	性別	男性	度数	46	50	25	11	132
			性別 の %	34.8%	37.9%	18.9%	8.3%	100.0%
		女性	度数	42	80	41	12	175
			性別 の %	24.0%	45.7%	23.4%	6.9%	100.0%
	合計		度数	88	130	66	23	307
			性別 の %	28.7%	42.3%	21.5%	7.5%	100.0%
3年生	性別	男性	度数	29	53	24	6	112
			性別 の %	25.9%	47.3%	21.4%	5.4%	100.0%
		女性	度数	46	61	49	7	163
			性別 の %	28.2%	37.4%	30.1%	4.3%	100.0%
	合計		度数	75	114	73	13	275
			性別 の %	27.3%	41.5%	26.5%	4.7%	100.0%

学年		値	自由度	漸近有意確率（両側）
1年生	Pearson のカイ2乗	5.105[a]	3	.164
3年生	Pearson のカイ2乗	3.723[b]	3	.293

a. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 9.89 で

b. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 5.29 で

次に、学校の授業で習う以外の「社会」への関心について見よう。表 3-5 によると、大学で社会学を専攻している学生にもかかわらず、高校時代、「社会」について「あまり関心なし＋まったく関心なし」という人が 5 割近くいる。学年による差はほとんどない。このことから、「『社会』についての関心はあまりないにもかかわらず社会学を専攻する」という進路選択のあり方が、決して少数派ではないことがわかる。

次に男女差に注目すると、高校時代における「社会」への関心については、1 年生・3 年生ともに、男女でも差はほとんどない。

表 3-5　高校時代の「社会」への関心

学年				とても関心あり	少し関心あり	あまり関心なし	まったく関心なし	合計
1年生	性別	男性	度数	23	53	48	7	131
			性別 の %	17.6%	40.5%	36.6%	5.3%	100.0%
		女性	度数	23	70	75	6	174
			性別 の %	13.2%	40.2%	43.1%	3.4%	100.0%
	合計		度数	46	123	123	13	305
			性別 の %	15.1%	40.3%	40.3%	4.3%	100.0%
3年生	性別	男性	度数	17	37	53	5	112
			性別 の %	15.2%	33.0%	47.3%	4.5%	100.0%
		女性	度数	22	67	64	8	161
			性別 の %	13.7%	41.6%	39.8%	5.0%	100.0%
	合計		度数	39	104	117	13	273
			性別 の %	14.3%	38.1%	42.9%	4.8%	100.0%

学年		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
1年生	Pearson のカイ2乗	2.338[a]	3	.505
3年生	Pearson のカイ2乗	2.301[b]	3	.512

a. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 5.58 です。

b. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 5.33 です。

次に、入学前に「社会学」という学問について知っていたかについて見よう。表Ⅲ-3-6によると、1年生・3年生ともに「よく知っていた」という学生はほとんどいない。「よく知っていた＋少しは知っていた」という割合を見ると、3割～4割の学生が「知っていた」と答えている。逆にいうと、6割～7割の学生が「ほとんど知らない＋まったく知らない」と答えており、全体として「社会学」についてよく知らないで「社会学」を専攻することを決める学生が多いことがわかる。

男女の違いに注目すると、1年生・3年生ともに「よく知っていた＋少しは知っていた」という回答が、男子学生より女子学生で約10ポイント多く、女子学生のほうが「社会学」について何らかの知識を持っていた人が多いといえる（この男女差は、1年生では統計的に有意とはいえないが、3年生では10%水準で有意である）。

以上から、過半数の学生は、高校時代の「社会科」には興味を持っていたが、現実の「社会」にはあまり関心を持っていなかったということがわかった。そして同じく過半数の学生は、社会学がどのようなものかについてあまり知らないで、社会学を専攻することを決め、入学後に初めて社会学に出会うということがわかった。

表 3-6　入学前に「社会学」という学問について知っていたか

学年				よく知っていた	少し知っていた	ほとんど知らない	まったく知らない	合計
1年生	性別	男性	度数	2	43	66	20	131
			性別 の %	1.5%	32.8%	50.4%	15.3%	100.0%
		女性	度数	6	73	75	21	175
			性別 の %	3.4%	41.7%	42.9%	12.0%	100.0%
	合計		度数	8	116	141	41	306
			性別 の %	2.6%	37.9%	46.1%	13.4%	100.0%
3年生	性別	男性	度数	1	26	59	26	112
			性別 の %	.9%	23.2%	52.7%	23.2%	100.0%
		女性	度数	1	63	72	27	163
			性別 の %	.6%	38.7%	44.2%	16.6%	100.0%
	合計		度数	2	89	131	53	275
			性別 の %	.7%	32.4%	47.6%	19.3%	100.0%

学年		値	自由度	漸近有意確率（両側）
1年生	Pearson のカイ2乗	4.116[a]	3	.249
3年生	Pearson のカイ2乗	7.490[b]	3	.058

a. 2 セル (25.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 3.42 です。

b. 2 セル (25.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .81 です。

1.3.2 入学後

そこで次に、入学後における社会学との出会いとその後についてみよう。

まず、社会学を「おもしろい」とはじめて感じた場面はどのような場面だろうか。「おもしろく感じたことはない」という学生が、1年生で11.4%（男15.2%、女8.6%）、3年生で3.6%（男5.4%、女2.5%）いた。

これらの人を除き、「はじめておもしろい」と思った場面を回答した人について、その内わけを示したのが表 3-7である。この表によると、全体では「講義を受けていて」と回答した者が約6割で最も多かった。

同じ表で男女を比べると、1年生では男女差はほとんどない。しかし3年生では、女子学生は「講義」と答える割合がやや多く、それに対して男子学生は、「演習系の授業中に＋調査にかかわっていて」と答える割合がやや多いように思われる（ただし5%水準で統計的に有意ではない）。

表 3-7　社会学が「はじめておもしろい」と思った場面

学年				講義	演習系の授業＋調査	先生の個別指導	本を読んで	覚えてない＋その他	合計
1年生	性別	男性	度数	61	17		12	21	111
			性別 の %	55.0%	15.3%		10.8%	18.9%	100.0%
		女性	度数	94	24		15	23	156
			性別 の %	60.3%	15.4%		9.6%	14.7%	100.0%
	合計		度数	155	41		27	44	267
			性別 の %	58.1%	15.4%		10.1%	16.5%	100.0%
3年生	性別	男性	度数	60	23		8	15	106
			性別 の %	56.6%	21.7%		7.5%	14.2%	100.0%
		女性	度数	100	25	3	6	23	157
			性別 の %	63.7%	15.9%	1.9%	3.8%	14.6%	100.0%
	合計		度数	160	48	3	14	38	263
			性別 の %	60.8%	18.3%	1.1%	5.3%	14.4%	100.0%

学年		値	自由度	漸近有意確率（両側）
1年生	Pearson のカイ2乗	1.092[a]	3	.779
3年生	Pearson のカイ2乗	5.365[b]	4	.252

a. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 11.22 です。

b. 2 セル (20.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 1.21 です。

それでは、「はじめておもしろい」と感じたのは何年生の頃だろうか。表 3-8は、前頁の表 3-7で「はじめておもしろい」と感じた場面を具体的に回答した人に対して、「それは何年生のときだったか」を集計した結果である。1年生については当然ながら、全員が「1年生のとき」という回答である。3年生の回答を見ると、6割以上の人がそれは「1年生のとき」だったと答えている。

表 3-7と表 3-8の結果をあわせると、「1年生」のために入門として行われる社会学の「講義」で、はじめて「おもしろい」と感じる場合が多数派のようである。このことから、社会学をほとんど知らないで入学してくる社会学専攻の新入生に、そのおもしろさを伝える場として、入門的な講義は一定の役割を果たしているといえる。

しかし逆に、1年生の時点では「おもしろい」と感じなかった学生が4割もいるということである。このことから、講義だけではなく演習系の授業も含めて、社会学の導入教育において「おもしろい」と感じさせる何らかの対策が必要かもしれない。

また表 3-8で男女差に注目すると、「はじめておもしろい」と思った時期に関して、大きな男女差はないようである。

表 3-8 「はじめておもしろい」と思った場面は何年生のときか

学年				1年生の時	2年生の時	3年生の時	合計
1年生	性別	男性	度数	86			86
			性別 の %	100.0%			100.0%
		女性	度数	123			123
			性別 の %	100.0%			100.0%
	合計		度数	209			209
			性別 の %	100.0%			100.0%
3年生	性別	男性	度数	61	24	4	89
			性別 の %	68.5%	27.0%	4.5%	100.0%
		女性	度数	79	42	8	129
			性別 の %	61.2%	32.6%	6.2%	100.0%
	合計		度数	140	66	12	218
			性別 の %	64.2%	30.3%	5.5%	100.0%

学年		値	自由度	漸近有意確率（両側）
1年生	Pearson のカイ2乗	.[a]		
3年生	Pearson のカイ2乗	1.260[b]	2	.533

a. 従属変数 が一定のため統計量は計算されません。

b. 1 セル (16.7%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 4.90 です。

次に、今まで受けた社会学関連の授業の中で「いちばんおもしろい」と感じた授業はどのような形態の授業か、またそこには男女差があるのかについて見てみよう。

「そのような授業はない」と答えた人が1年生では22.9%（男20.5%、女24.7%）、3年生では減少して8.4%（男12.5%、女5.5%）であった。これらの人と無回答の人を除いて、「いちばんおもしろい」と感じた授業の形態を示したものが表3-9である。この表によると、かなりはっきりとした男女差が見られた（統計的にも5%水準で有意である）。1年生・3年生に共通して、女子学生では「講義系」と回答した人が6割以上を占め多数派であるが、男子学生では「演習系＋実習系」と回答した人が5割以上を占め、こちらの方が多数派である。この結果は、先に表3-7で見た「初めておもしろいと思った」場面についての回答とも一致する。

つまり、「女子学生は講義が好き、男子学生は演習・実習が好き」という傾向がかなりはっきり見られるのである。

表 3-9　「いちばんおもしろい」と思った社会学関連の授業

学年				講義系	演習系＋実習系	卒論指導＋その他	合計
1年生	性別	男性	度数	46	51	3	100
			性別 の %	46.0%	51.0%	3.0%	100.0%
		女性	度数	83	41	3	127
			性別 の %	65.4%	32.3%	2.4%	100.0%
	合計		度数	129	92	6	227
			性別 の %	56.8%	40.5%	2.6%	100.0%
3年生	性別	男性	度数	43	49	2	94
			性別 の %	45.7%	52.1%	2.1%	100.0%
		女性	度数	90	53	6	149
			性別 の %	60.4%	35.6%	4.0%	100.0%
	合計		度数	133	102	8	243
			性別 の %	54.7%	42.0%	3.3%	100.0%

学年		値	自由度	漸近有意確率（両側）
1年生	Pearson のカイ2乗	8.610[a]	2	.014
3年生	Pearson のカイ2乗	6.658[b]	2	.036

a. 2 セル (33.3%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 2.64 です。

b. 2 セル (33.3%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 3.09 です。

このような傾向は、次に見る授業への満足度にも表れている。表 3-10 は講義系の科目への満足度を示したものである。まず3年生の回答を見ると、女子学生では「満足＋どちらかといえば満足」という人が約7割を占め男子学生より多いが、男子学生では「やや不満」という人が女子学生より多い。そしてこの違いは5%水準で統計的にも有意である。1年生については、統計的には有意ではないが、同様の傾向が見られる。

それに対して表 3-11 で演習系の科目への満足度を見ると、1年生・3年生ともに男女で満足度の差はない。これら2つの表から、男子学生は「演習には満足だが、講義にはやや不満」、女子学生は「講義にも演習にも満足」であるということがわかる。

ちなみに上記の2つの表で、講義系科目への満足度と演習系科目への満足度を比較すると、講義系では、男女計で「満足＋どちらかといえば満足」という人は、1年生・3年生とも約6割である。それに対して演習系では、「満足＋どちらかといえば満足」という人は、1年生では6割だが、3年生では8割であり、学年がすすむにつれ、演習系科目への満足度が高まっていくことがわかる。

それではなぜ、男子学生は講義系の科目に不満なのか。この問いに対して、「男子学生は講義という人から教えられる学び方より、自分で学ぶことを好む」という仮説が考えられる。はたして、男子学生のほうが女子学生より、自主学習に熱心といえるのだろうか。

表 3-12 は、入学後に読んだ社会学関連の本の数を聞いた結果である。平均値（平均冊数）を見ると、1年生・3年生とも、女子学生のほうが男子学生より読んだ本の数は多く、この差は統計的にも有意である。もちろん、1年生より3年生のほうが読んだ冊数は多く、これも統計的に有意である。

また表 3-13 は、読んだ本の中で「おもしろい」と思った本があるかどうかを聞いたものである。この結果を見ると、1年生・3年生ともに、「ある」と答えた人はやや女子学生のほうが多い傾向がある（ただし5%水準で統計的には有意でない）。

これらの結果から、読書という学習法についてみる限り、必ずしも男子学生のほうが女子学生より自分での勉強に熱心とはいえない。したがって「男子学生は『演習には満足だが、講義にはやや不満』、女子学生は『講義にも演習にも満足』」という傾向については、別の解釈が必要である。これについては、本章の最後で考察したい。

表 3-10　講義系の科目への満足

学年				満足	どちらかといえば満足	やや不満	不満	合計
1年生	性別	男性	度数	11	56	43	17	127
			性別 の %	8.7%	44.1%	33.9%	13.4%	100.0%
		女性	度数	13	89	55	13	170
			性別 の %	7.6%	52.4%	32.4%	7.6%	100.0%
	合計		度数	24	145	98	30	297
			性別 の %	8.1%	48.8%	33.0%	10.1%	100.0%
3年生	性別	男性	度数	4	55	43	10	112
			性別 の %	3.6%	49.1%	38.4%	8.9%	100.0%
		女性	度数	13	98	39	12	162
			性別 の %	8.0%	60.5%	24.1%	7.4%	100.0%
	合計		度数	17	153	82	22	274
			性別 の %	6.2%	55.8%	29.9%	8.0%	100.0%

学年		値	自由度	漸近有意確率（両側）
1年生	Pearson のカイ2乗	3.528[a]	3	.317
3年生	Pearson のカイ2乗	8.382[b]	3	.039

a. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 10.26 です。

b. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 6.95 です。

表 3-11　演習系の科目への満足

学年				満足	どちらかといえば満足	やや不満	不満	合計
1年生	性別	男性	度数	15	61	34	13	123
			性別 の %	12.2%	49.6%	27.6%	10.6%	100.0%
		女性	度数	16	82	47	22	167
			性別 の %	9.6%	49.1%	28.1%	13.2%	100.0%
	合計		度数	31	143	81	35	290
			性別 の %	10.7%	49.3%	27.9%	12.1%	100.0%
3年生	性別	男性	度数	24	63	20	3	110
			性別 の %	21.8%	57.3%	18.2%	2.7%	100.0%
		女性	度数	41	92	25	3	161
			性別 の %	25.5%	57.1%	15.5%	1.9%	100.0%
	合計		度数	65	155	45	6	271
			性別 の %	24.0%	57.2%	16.6%	2.2%	100.0%

学年		値	自由度	漸近有意確率（両側）
1年生	Pearson のカイ2乗	.861[a]	3	.835
3年生	Pearson のカイ2乗	.860[b]	3	.835

a. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 13.15 です。

b. 2 セル (25.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 2.44 です。

表 3-12　社会学関連で読んだ本の数

従属変数: 読んだ社会学の本の数

学年	性別	平均値	標準偏差	N
1年生	男性	3.14	3.219	124
	女性	4.70	7.370	164
	総和	4.02	5.991	288
3年生	男性	12.95	12.031	111
	女性	15.97	14.055	155
	総和	14.71	13.308	266
総和	男性	7.77	9.880	235
	女性	10.17	12.464	319
	総和	9.16	11.491	554

従属変数: 読んだ社会学の本の数

	ﾀｲﾌﾟ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正ﾓﾃﾞﾙ	16549.611[a]	3	5516.537	53.726	.000
切片	45604.346	1	45604.346	444.148	.000
学年	15015.791	1	15015.791	146.241	.000
性別	705.281	1	705.281	6.869	.009
学年・性別の交互作用	71.443	1	71.443	.696	.405
誤差	56473.039	550	102.678		
総和	119458.000	554			
修正総和	73022.650	553			

a. R2乗 = .227 (調整済みR2乗 = .222)

表 3-13　社会学関連でおもしろかった本の有無

学年				なし	あり	合計
1年生	性別	男性	度数	82	32	114
			性別 の %	71.9%	28.1%	100.0%
		女性	度数	97	53	150
			性別 の %	64.7%	35.3%	100.0%
	合計		度数	179	85	264
			性別 の %	67.8%	32.2%	100.0%
3年生	性別	男性	度数	63	44	107
			性別 の %	58.9%	41.1%	100.0%
		女性	度数	77	73	150
			性別 の %	51.3%	48.7%	100.0%
	合計		度数	140	117	257
			性別 の %	54.5%	45.5%	100.0%

学年		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
1年生	Pearson のｶｲ2乗	1.565[b]	1	.211
3年生	Pearson のｶｲ2乗	1.434[c]	1	.231

b. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 36.70 です。

c. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 48.71 です。

1.3.3 社会学を学んで得たこと

最後に、社会学を学んで何か得ることができたか、また社会学を学んだことは卒業後、自分にとって役にたつか、役に立つとすればどのような点かについて、調査結果を見よう。

まず表 3-14 で、「社会学を学んで何か得ることができたと思うか」について、男女計を比べると、「とてもそう思う＋少しそう思う」と答えた人が 1 年生では 57.0%だが、3 年生では 89.5%を占めており、社会学を学び続けることによって「何かを得た」と感じる割合が増加することがわかる。

次に同じ表で男女差に注目すると、3 年生の回答では、何か得ることができたかについて「とてもそう思う＋少しそう思う」と答えた人は、男子学生より女子学生で多く、この差は 10%水準で統計的にも有意である。1 年生では、男子学生で「無回答」がやや多いことが目立つが、それ以外で大きな男女差はない。

表 3-14　社会学を学んで何か得ることができたと思うか

学年				とても＋少しそう思う	あまり＋まったく思わない	無回答	合計
1年生	性別	男性	度数	72	40	20	132
			性別 の %	54.5%	30.3%	15.2%	100.0%
		女性	度数	103	57	15	175
			性別 の %	58.9%	32.6%	8.6%	100.0%
	合計		度数	175	97	35	307
			性別 の %	57.0%	31.6%	11.4%	100.0%
3年生	性別	男性	度数	95	13	4	112
			性別 の %	84.8%	11.6%	3.6%	100.0%
		女性	度数	151	11	1	163
			性別 の %	92.6%	6.7%	.6%	100.0%
	合計		度数	246	24	5	275
			性別 の %	89.5%	8.7%	1.8%	100.0%

学年		値	自由度	漸近有意確率（両側）
1年生	Pearson のカイ2乗	3.226[a]	2	.199
3年生	Pearson のカイ2乗	5.444[b]	2	.066

a. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 15.05 です。

b. 2 セル (33.3%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 2.04 です。

次に表 3-15 で、「社会学を学んだことは卒業後、役に立つと思うか」についての回答を見よう。この問いに対して 1 年生では「無回答」がかなりの割合で見られるが、3 年生では「無回答」はほとんどない。また「たいへん役に立つ＋少しは役に立つ」と答えた人は男女計で、1 年生では 71.3%であるが、3 年生になると 86.5%と 9 割近くにまで増えている。前の表と同様に、社会学を学び続けることによって「卒業後、役に立つ」と感じる人が増加するといえる。男女差に注目すると、1 年生で男子学生に「無回答」が多いことを除いて、目立った男女差はない。

そこで次に、表 3-15 で「たいへん＋少しは役に立つ」と答えた人に、具体的にどういう意味で役に立つと思うかを聞いた。その結果を表 3-16 に示した。これをみると、1 年生では男女差はあまり見られないが、3 年生では男女で異なる傾向が見られた。男子学生では、社会学で学んだことが「ものの見方」において役に立つといった回答が多かった。それに対して女子学生では、「専門性」や「社会生活についての知識」において役に立つといった回答が多かった（ただし 5%水準で統計的には有意ではない）。分析対象となった大学はいずれも男女共学なので、どの大学においても、男女間で教育内容に違いはない。にもかかわらずこのように回答に差が見られるのは、男子学生と女子学生では社会学で学んだことについての受け取り方が違うのだと考えられる。

表 3-15　卒業後、社会学を学んだことは役に立つと思うか

学年				たいへん＋少しは役に立つ	あまり＋まったく役に立たない	無回答	合計
1年生	性別	男性	度数	88	22	22	132
			性別 の %	66.7%	16.7%	16.7%	100.0%
		女性	度数	131	28	16	175
			性別 の %	74.9%	16.0%	9.1%	100.0%
	合計		度数	219	50	38	307
			性別 の %	71.3%	16.3%	12.4%	100.0%
3年生	性別	男性	度数	95	14	3	112
			性別 の %	84.8%	12.5%	2.7%	100.0%
		女性	度数	143	18	2	163
			性別 の %	87.7%	11.0%	1.2%	100.0%
	合計		度数	238	32	5	275
			性別 の %	86.5%	11.6%	1.8%	100.0%

学年		値	自由度	漸近有意確率（両側）
1年生	Pearson のカイ2乗	4.169[a]	2	.124
3年生	Pearson のカイ2乗	.955[b]	2	.620

a. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 16.34 です。

b. 2 セル (33.3%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 2.04 です。

表 3-16　どういう意味で役に立つか（たいへん＋少しは役に立つと答えた人）

学年				人間関係	専門性	社会生活の知識	ものの見方	合計
1年生	性別	男性	度数	3	11	20	31	65
			性別 の %	4.6%	16.9%	30.8%	47.7%	100.0%
		女性	度数	6	13	34	45	98
			性別 の %	6.1%	13.3%	34.7%	45.9%	100.0%
	合計		度数	9	24	54	76	163
			性別 の %	5.5%	14.7%	33.1%	46.6%	100.0%
3年生	性別	男性	度数	10	10	20	42	82
			性別 の %	12.2%	12.2%	24.4%	51.2%	100.0%
		女性	度数	13	26	37	51	127
			性別 の %	10.2%	20.5%	29.1%	40.2%	100.0%
	合計		度数	23	36	57	93	209
			性別 の %	11.0%	17.2%	27.3%	44.5%	100.0%

学年		値	自由度	漸近有意確率（両側）
1年生	Pearson のカイ2乗	.724[a]	3	.868
3年生	Pearson のカイ2乗	3.937[b]	3	.268

a. 1 セル (12.5%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 3.59 です。

b. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 9.02 です。

1.4 考察と結論

この章では、社会学と社会学教育に対する男子学生と女子学生の受け取り方を比較してきた。その結果、男女差として最も印象的だったのは、女子学生は講義系の科目をいちばんおもしろいと思い、満足度も高いのに対し、男子学生は講義系の課目に対しては不満が多く、むしろ演習系の科目をいちばんおもしろいと感じ、それに対する満足度も高いという点である。

このことは何を意味しているのであろうか。先に見たように、男子学生のほうが読書をはじめとする自主学習に熱心であるとはいえない。したがって、演習系科目のなかの、自主学習という側面とは別の側面が、男子学生にとって魅力的なのである。その側面とは、演習系科目には、発表・ディスカッション・調査など、授業の中で学生自身が活躍できる場面が用意されているという点ではないだろうか。講義のようにいわば「教員の活躍をながめる」のではなく、演習系科目のように「(教員によってセッテイングされた場面で、教員によるスーパーヴァイズを受けながら）自分自身が活躍する場」を、男子学生は大学教育の中に求めているのではないだろうか。

したがって、男子学生の比率が高いクラスでは、演習系の科目はもちろん、講義系の科目においても、何らかの形で学生自身が活躍できるような仕掛けを用意することが必要なのかもしれない。

しかしこれは、女子学生に対してはそのような場を与える必要性が低いという意味ではない。女子学生が講義系科目に対して満足度が高いのは、「教員の活躍をながめる」（＝講

義）ことにそれほど不満を感じていないせいであり、それは単に彼女らが伝統的な女性役割に適応しているだけなのかもしれない。したがって、講義を好みがちな女子学生に対してこそ、彼女たちが能動的に活躍しなければならないような授業の仕組みを考え、また能動的に活躍する女子学生を評価するような雰囲気を、クラスの中に作っていく必要があるのではないだろうか。

女子学生の性役割意識についての質問がないために、上記の仮説は本調査では確かめることができなかった。性役割意識と、講義系科目と演習系科目のどちらがおもしろいかについての意識の関連を見ることは、今後の課題である。

男女差について次に印象的だったのは、「社会学を学んだことが卒業後、どういう意味で役に立つか」という質問に対し、女子学生は「専門性」や「社会生活での知識」といったいわば「社会人・職業人として生活していくうえでのそれなりに具体的な知識を得た」という点で役に立つと答えているのに対し、男子学生はそのような知識ではなく、むしろ「ものの見方」といった点で役に立つと答えている点である。

同じ教育内容に対して、男女で受け取り方がこのように異なるのはなぜなのか。社会学の知識は、おもに公共領域についての知識である。公共領域とは、伝統的には、女性がアクセスしにくかった領域である。もし、女子学生が、家族生活や日常生活において、公共領域の知識にアクセスしにくいというよう状況が現在でも残っていたとすると、社会学で学ぶ公共領域についての知識は、女子学生にとって、「家庭や女性の日常生活の中では得にくいが、将来、公共領域で活動していくために必要な具体的な知識」と感じられるのではないだろうか。それに対して男子学生は、社会学教育の場を離れた日常生活においても、公共領域についての知識に触れる機会が女子学生より多いのかもしれない。そのような知識を持っている男子学生にとっては、社会学の知識は、自分がすでに持っている公共領域についての「常識的な見方」とは異なる「別のものの見方」としか感じられないのかもしれない。

近年の社会学は、公共領域だけでなく、私的な領域やミクロな相互作用について多く扱うようになった。それは社会学が扱う対象の広がりであり、その面ではたしかに新たな知識を開いてきた。しかし、学部の学生、特に女子学生に対する教育という観点からすると、彼ら／彼女らに公共領域についての知識を提供するということも、社会学教育が果たすべき役割として今後も重要であり続けるのではないか。したがって、ミクロな相互作用についての知識と同時に、マクロな社会についての知識／公共領域についての知識も、バランスよく提供していくことが、学部の学生に対する社会学教育には求められているのではないだろうか。

最後に、男女共通の傾向として、重要だと思われる点について指摘したい。分析対象となった私立大学の学生たちは、高校時代、「社会」について必ずしも関心を持っておらず、また「社会学」についてもよく知らないまま、社会学を専攻するコースに入学してきている。しかしそれにもかかわらず、1年生の終わり近くの時期に、6割の学生が社会学を「おもしろい」と感じている。そして、学年がすすむにつれ「おもしろい」と感じたり「役に立つ」と感じる学生は増えていく。この実態を見ると、1年生段階での社会学の導入教育は非常に重要であり、しかもまあまあ成功していると思われる。

しかし、残りの4割の学生は、1年生の終わりごろでも社会学を「おもしろい」と感じ

られていない。今後、より多くの学生が社会学との「おもしろい」出会いを1年生の段階でできるよう、導入教育におけるよりいっそうの工夫が必要だと感じた。